

## 《シモン・ボッカネグラ》の新演出で チューリヒ歌劇場が1日だけオープン

スイス連邦は、州によって異なる感染防止対策を実施しているが、50人以上のイベント禁止は全国共通だ。ベルン州のように劇場自体が閉鎖している州もあるが、開けても採算が取れないため休止符を打たざるをえない状況だ。

チューリヒでは歌劇場もトーンハレも2月までの閉鎖を発表している。そんななかの12月6日、スイスのサンタさん、サミクラウスが子供たちにビーナッツとお菓子とみかんの入っている袋を配る日に、10月末から閉鎖されていたチューリヒ歌劇場は1日だけ開場し、ヴェルデイ《シモン・ボッカネグラ》の新演出を贈った。1000人強収容できる当歌劇場に散らばった50人の観客だけが、舞台上のソリストのみの生演奏を体感できる。オーケストラと合唱団は約1キロメートル離れた練習場で演奏し、その音は光ファイバーを通し、光速で劇場に届けられる。それをARTEテレビが生放送した。

この演目は任期最後の年を迎えたファビオ・ルイジ音楽総監督とアンドレアス・ホモキ総裁の演出というコンビでは最後の作品となるので、共に率いた8年間の集大成となる。題名役にはドイツが誇る知性派バリトンのクリスティアン・ゲルハーヘルが初挑戦し、フィエスコ役もやはりドイツの中堅バス、クリストフ・フィツシュエツサーが初めて歌うとあって、期待と共に、ドイツ色の強いイタリア・オペラになるかもしれないという恐れも抱えて劇場に向かった。

オーケストラの生演奏のない喪失感、合

唱団のパワーに支えられない舞台のスケールの小ささは9月のシーズンオープンニング、ムソルグスキー《ボリス・ゴドノフ》等で体験していたが、それでも1カ月半ぶりに歌劇場で聴くヴェルデイのオーケストラ・シモンには胸がたかぶった。

幕が開くと、そこには小舟が。回り舞台を駆使して場面転換を行うのだが、走馬灯のような効果を生み、25年前のプロローグと現在、そして過去の回想や状況説明に活躍する。舞台上から響く生の歌声が振動させる劇場の空気が愛おしい。そして登場するゲルハーヘルへの響きの美しさは卓越してみずみずしい。オーケストラはどうしてもおとなしく、音からにじみ出る躍動感で心を揺さぶることはできないが、タイミングの合致やリズムの正確さで端正な緊張感を醸し出している。

フィツシュエツサーも美しく歌うのだが、音楽に未熟さが表れてしまい、この役はまだ荷が重いようだ。ゲルハーヘルも幕が進むうち、明るすぎる「ア」の母音と柔らかな過ぎる声の使いかたが気になり始める。フォルテではドラマティックな表現で調和されるのだが、リリックに歌う部分で明るすぎるとフレーズ全体が軽くなり、シモナーの人物像までが弱くなってしまふ。アメリカ役のジェニファア・ロウリーは長いレガートを保てる重厚なソプラノで満足感はあるのだが、高音が耳障りだ。ガブリエーレ役のオタール・ジョリキアは当歌劇場オペラ・スタジオ出身だが、声は立派だが華がない。しかもアンサンブルのなかで音を大きく外した部分が数カ所あり、声が割れることもあった。オーケストラ・ピットから流れてくる音でないために、聴き取りにくいのか、生放送で緊張しているの

か、それを差し引いても許容範囲を超えていたのは残念だった。

演出面では、回り舞台の奥から合唱団の声を出すスピーカーの移動とポリリウム調整を使って、迫りくる群衆を表現したのはすばらしかった。登場するエキストラたちは覆面姿で違和感なく蜂起する民衆を演じ、彼らを押し込むようにドアを閉めるだけで、実際の人数を何十倍にも想像させる演劇的手法が光っていた。八重唱で観客席の照明が点く意味だけがわからなかった。

父娘の再会シーンは音楽的にもいちばん感動を呼んだが、クライマックスは、シモナーがバオロに自分を呪わせるシーンだ。バオロ役のニコラス・ブラウンリーはいちばんの適役だった。恐れや悲哀も表せる悪役として、またヴェルデイの求める声にもいちばん近かった。音楽的にも、遠隔で演奏しているはずのオーケストラが存在感を増してドラマを主導し、緊張感をどんどん煽っていく。これはヴェルデイも気に入るであろう。そして自分で自分へ呪いを宣言して慄くバオロを残し、舞台中央へゆっくり去って行くゲルハーヘルの背中での演技は、どんな行動よりも効果的な威圧感を見せた。最後に奏でるオーケストラの後奏が、シンコペーションの効果が生かせず、テ

ンションが下がってしまったのだけが残念だった。最後まで抱き合わない演

出、シモナーの死も下手（舞台向かって左側）奥に去っていくだけ、感染防止策とのしがらみのなかでは最高の演出だっただろう。オーケストラも遠隔共演のなかで最高の存在感を示した。問題はただ一つ。すばらしい歌唱力を持つ歌手たちが、「イタリア語で歌っていない」ことだ。音楽的に美しくても、アルファベットの発音が合っていない。これは、イタリア人の指揮者やスタア歌手が世界のオペラ界に君臨しなくなった現在の、世界共通の課題である。



チューリヒ歌劇場の《シモン・ボッカネグラ》から。シモン役のゲルハーヘル(左)とバオロ役のブラウンリー(右) ©Monika Rittershaus